青鬼（あおおに）0（ゼロ）-ZERO-

はじまりのジェイルハウス

noprops（ノプロプス）／原作
黒田研二（くろだけんじ）／著
鈴羅木かりん（すずらぎ）／イラスト

PHP
ジュニアノベル

怪物（ブルーデーモン）

ブルーベリー色の巨人。人間を見るとおそいかかってくる。宇宙から飛来した物質・ブルースターの中に入っていた虫「パラサイトバグ」が体内に入ることが原因で、人間が怪物に変異する可能性があることがわかってきた。

ジュニアノベル

「青鬼」シリーズはこんなお話！

小学五年生のひろしたちは、「ジェイルハウス」などあらゆる場所で怪物に遭遇したが、犬が苦手であることや、頭が重く泳ぐことができないなどの弱点を突くかたちで、なんとか魔の手を逃れてきた。

ひろし

北部小学校に通っている。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぞ解きが得意。

ジェイルハウス

碧奥市の街外れにある洋館。「怪物が出る」という不気味なうわさがささやかれている。うわさを知らない、小学三年生の和寛とその父親が引っ越してきたが……。

和寛

タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人たちを助けるために、怪物と勇敢にたたかう。

メサイア

「この世界をブルーデーモンでうめつくすこと」を目的に、ブルースターおよびパラサイトバグを部下に集めさせている。

今作は、ひろし達が青鬼に初めて遭遇する日から一一年前のお話……。

目次

1 古びた洋館で 005
2 新しい我が家 013
3 地下室のお友達 020
4 ジェイルハウスのうわさ 030
5 ぼくの願いごと 041
6 カエデさんを追って 049
7 地下室の冒険 062
8 元気になった理由 071
9 カエデさんの正体 079
10 ブルーベリー色の化け物 090
11 強くなりたい 102
12 友達できるかな？ 111
13 森の中で 121
14 目の前の化け物 131
15 絶望 141
16 おやすみ 153
和寛によるなぞの解説 170

1 古びた洋館で

管理人から預かったカギをカギ穴に差しこむ。

カギはいまどきあまり見たことのない真鍮製だ。太陽の光を反射して黄金色にかがやいている。カギの頭の部分は複雑な幾何学模様となっていた。ずいぶんと古めかしい。一体、いつの時代に作られたものなのだろう？　自然と興味がわいてくる。

ドアもずいぶんと時代がかったシロモノだった。ノブは差しこんだカギと同じく真鍮製だし、ドアの表面には花をかたどった彫刻までほどこされている。

もともとは立派な洋館だったにちがいない。だが、二十年近くなんの手入れもされてこなかったため、今はひどくあれ果ててしまっていた。窓は割れ、外壁もところどころくずれ落ちている。入り口の鉄門を乗りこえて不法侵入する者もいるらしく、玄関前には空き缶や空のペットボトルが散乱していた。

カギ穴に差しこんだカギをゆっくりと左に回す。カチリ、とロックのはずれる音が聞こえた。ノブを回すと、とびらはきしんだ音を立てて外側に開いた。

かびくさいにおいが鼻孔を刺激する。館の中にふみこんだとたん、砂ぼこりが勢いよく舞い上がった。

男はくしゃみを三回くり返したあと、玄関口から屋敷内を見わたした。

立派な建物だ。天井からは外国映画でしか見かけたことのない、豪華なシャンデリアがぶら下がっている。色とりどりのガラスがはめこまれていて、まるでステンドグラスのようだ。階段には真っ赤な絨毯がしかれ、その奥には銀色のよろいをまとった西洋の甲冑がかざられていた。玄関口から射しこんだ陽の光を反射して、甲冑の持っていた剣の先がきらりと光る。今にも動き出しそうで少し不気味だ。

男は甲冑から視線をそらすと、くつをはいたまま屋敷内へと上がりこんだ。廊下には分厚くほこりが積もっており、とてもくつをぬぐ気分にはなれない。

階段横の太い柱に近づき、指先で表面を軽くたたいてみる。よい木材だ。かなり古いがくさっていないことは音ですぐにわかった。しゃがみこんで、床板の状態も調べる。よごれてはいるが、こちらもしっかりしていた。ていねいにほこりをふき取ってワックスをかければ、見ちがえるほどキレイになるだろう。それほど困難な作業ではなさそうだ。

男は小さな工務店の職人だった。古びた洋館のリフォームをたのまれ、下見にやってきたところだ。

以前、この洋館には外国人の家族が住んでいたらしいのだが、ある日、なんの前ぶれもなしに行方をくらましてしまったという。それから十八年間、この館は放置されたままだった。庭の雑草はのび放題。建物は次第に劣化し、外観は幽霊屋敷のようなありさまだ。

興味本位で屋敷に近づいた若者が、この世のものとは思えぬ化け物を見たという話がまことしやかに広がり、あの館に一度入ったら永遠に出てこられなくなる——館にすむ化け物に食べられてしまうらしい——と様々なエピソードが付け加えられて、人々はここを監獄の館——〈ジェイルハウス〉と呼ぶようになった。

あそこにはブルーベリー色の不気味な巨人がすみついているっていううわさですよ。私の知り合いの友人も目撃したことがあるそうです。

不動産業者の人が真顔でそう話してくれたのを思い出す。

そんないわくつきの建物に、この春から新しい住居人がやってくるという。不動産業者は以前住んでいた外国人一家が謎の失踪をしたこと、それ以来、化け物が出るというううわさが流れていることをいっさいかくし、都会からやってくる新たな家族に破格の値段でこの屋敷を貸すことにしたらしい。

賃料を聞いておどろいた。マンション住まいの我が家の家賃よりほんのちょっぴり高いだけだ。ここまで広いと庭の手入れや家の中の掃除が大変そうだが、それでもこんな屋敷で暮らしたら楽しいだろうなと思う。……化け物？　そんなものいるわけがない。ただのうわさだ。

ガタッ

どこからか物音が聞こえた。男は息を殺し、耳をすませる。

ガタガタッ

その音は床下からひびいているようだ。事前に見せてもらった屋敷の見取り図を思い出す。この洋館には地下室が存在した。地下室へと続く階段は奥の廊下を左に折れ曲がった先にあったは

ずだ。

ネコでも迷いこんでしまったのだろうか？

男は廊下を進んだ。

物音はますます大きくなっていく。ずいぶんと元気なネコらしい。

突き当たりのドアを開けると、コンクリート製の階段が地下に向かって続いていた。スマホのライトを点灯させ、先を進む。階段を一段下りるごとに自分を取り囲む空気が冷たくなっていくのがわかった。

階段を下りきった場所は物置スペースとなっていた。アンティーク感あふれる洋風のタンスや机など、大きな家具が雑然と積み重なっている。

ガタガタガタッ

音はコンクリートでできた壁の向こう側から聞こえてくるようだ。しかし、そちらへ移動できるような通路やドアは見当たらない。スマホのライトであちこち照らしたが、それらしきものはどこにも見つからなかった。

壁をたたいてみる。同時に物音がぴたりとやんだ。こちらを警戒したのかもしれない。

男は全神経を鼓膜に集中させ、たたく位置を少しずつずらしていった。六回目のノック音が微

妙に変化する。たぶん、彼でなければ気づくことはなかっただろう。
このあたりの壁だけうすくなっている。顔を近づけ、注意深く観察すると、わずかに盛り上がった部分があった。その部分を指先でつまみ、強く引っ張る。壁だとばかり思っていた場所がドアのように動き、壁の向こうに新たな通路が現れた。
……これはかくしとびら？
男は首をかしげた。なぜ、こんなものがあるのだろう？
通路の奥をのぞきこむと突き当たりにもうひとつ、鉄のとびらが見えた。とびらには太いクサリが巻きつけてあり、そのはしには大きな南京錠が取りつけられている。
彼はそのとびらに近づき、南京錠を引っ張った。闇の中にクサリのこすれ合う音がひびきわたる。
……おおお
とびらの向こうから動物の鳴き声のようなものが聞こえた。
……おおおおん
その声はひどく弱々しい。
「待ってろ。今助けてやるからな」

男は扉の向こう側に声をかけたが、クサリは頑丈でそう簡単にはちぎれそうにない。南京錠をはずすほうが手っ取り早そうだ。

こしにつけていたポーチから針金を取り出し、それを南京錠のカギ穴に差しこむ。こういう仕事をやっていると、カギのなくなった開かずのとびらや金庫に出くわすことがよくある。彼は独学でピッキングのテクニックを身に付け、今では針金一本でほとんどのカギを解錠するスキルを習得していた。

取りつけられた南京錠はふつうに市販されているようなありふれた仕組みのものだったため、解錠は簡単だった。一分と経たぬうちにロックがはずれる。

からまったクサリを取りはずし、男は鉄のとびらを開いた。

肉のくさったような——なんともいえない悪臭がただよってくる。

……一体、なにがいるんだ？

むくむくと不安がふくらみ始めた。うっかり迷いこんだネコでないことは気配で察することができる。

「……誰かいるのか？」

男はひどいにおいにたえながら、とびらの奥の何者かに向かって話しかけた。

……おぉおおおおおお！

突然、けものの声が野太く変化する。

巨大な黒いかたまりがこちらに近づいてくるのがわかった。身の危険を感じた彼は反射的に壁のほうへ身を寄せた。

ぶおおおおおおっ！

青くぶよぶよとしたなにかが猛スピードで男の真横をかけ抜けていく。けたたましい音を立てて、それは一階への階段をかけ上がっていった。

あそこにはブルーベリー色の不気味な巨人がすみついているっていううわさですよ。

不動産業者のひそひそ話が頭の中によみがえる。

どうやら、うわさは本当だったらしい。

遠くで玄関のドアが閉まる音を聞きながら、男はその場に力なく座りこみ、いつまでもガタガタとふるえ続けた。

2 新しい我が家

タクシーから降りたぼくはぐぐっとのびをすると、目の前に広がる大きな庭に目をやった。色とりどりのチューリップとパンジーがあざやかにさきほこり、その中央を縦断する真っ白な石畳は三階建ての洋館へと続いている。

「どうもありがとうございました」

しはらいをすませたお父さんがタクシーの運転手さんに向かって頭を下げる。運転手さんは変なものでも見るみたいにちらりとこちらに視線を向けたあと、逃げるようにタクシーを発進させた。

「ここが新しいおうち？」

手に持っていたリュックを背負い、お父さんにたずねる。

「ああ。立派だろう？」

お父さんは屋敷の後ろへしずもうとしている夕陽に目を細めながらいった。

「すごいや。外国のお城みたいだ」

お父さんによけいな心配をかけないよう、ぼくは陽気にふるまった。
「からだのほうは大丈夫か？」
「うん。元気いっぱいだよ」
本当のことをいえば、飛行機を降りたときから軽いめまいがずっと続いている。こめかみのあたりも少し痛かった。でも我慢できないほどじゃない。ぼくは強がってみせた。
生まれつきからだの弱いぼくは、これまで何度も入退院をくり返してきた。お医者さんの話だと心臓の動きが弱いせいで、血液を全身にうまく送り出せない病気らしい。だから、ぼくはほかの子供たちみたいにかけっこを楽しんだことがない。五分歩いただけでも息が切れてしまうのだから、走るなんてとんでもなかった。
お父さんはぼくの病気を治すため、優秀なお医者さんのいる病院を一生懸命探し回ってくれた。これまでに三回手術を受け、そのたびに「手術は大成功」といわれたけれど、ぼくの体調が

改善することはなかった。

——和寛、お父さんといっしょにどこか遠いところで暮らさないか？

お父さんがそう提案したのは去年の秋のことだった。

——生まれ育ったこの家をはなれるのはつらいと思う。ここにはお母さんとの思い出がいっぱいつまっているからな。だけど、いつまでもしがみついてちゃいけないと思うんだ。……わかるだろう？　お母さんがいなくなって二年が過ぎたというのに、いまだにこの家のことを——お母さんのことを悪くいう人がいる。おまえだってイヤな思いをいっぱいしてきただろう？　からだにもよくないに決まっている。俺たちのことをだれも知らない場所へ行こう。広い庭のある一軒家なんてどうだ？　だれの目も気にせず、思いきりひなたぼっこができるぞ。ここよりも空が青くて、遠くには山が見えて、少し歩けば海もあって……自然の残る静かな町へひっこせば、おまえの病気もきっとよくなるはずだ。

反対する理由などなかった。病気のせいでほとんど学校に通うことのできない僕には、友達と呼べる子なんてひとりもいない。アパートの窓から見える景色は、隣の家の灰色の壁だけ。すぐに息が切れるので、外出もできなかった。ときどき、お父さんが近所の公園まで連れていってくれたけど、ぼくたちのほうを見てひそひそとうわさ話を始める大人たちに正直、いつもうんざり

していた。

ぼくたちのことを知っている人がひとりもいない町で新しい生活を始めたら、なにかが変わるかもしれないと思った。「病は気から」という言葉どおり、ぼくの病気だってよくなる可能性がある。だからぼくは、期待に胸をふくらませ、この町——碧奥町にやってきたのだった。

広い庭の真ん中で目を閉じ、深呼吸をくり返す。都会とちがって空気がさわやかだ。たったそれだけのことでも、頭痛がやわらいだような気がした。

駅からここまでぼくたちを運んでくれたタクシーの運転手がじろじろと何度もこちらを見てきたことが少々気になったけど、深く考えないことにした。見慣れない客だから興味を持ったとか、その程度のことなのだろう。あるいはお父さんを見て、こわい人だと思ったのかもしれない。目つきがするどく、額に傷あとのあるお父さんは、外見だけでかんちがいされることが多い。本当はとてもおだやかでやさしい人なんだけどなあ。

玄関口に立ち、インターホンをおす。古めかしいドアとカメラ付きの真新しいインターホンの組み合わせはひどくちぐはぐに見えた。

しばらくしてとびらが開き、エプロン姿の若い女性が屋敷の中から現れた。

「お待ちしておりました」

新しい家に家政婦さんがいることは、事前にお父さんから聞いて知っていた。地元の派遣センターに依頼して、有能な家政婦さんに家事を手伝ってもらうことにしたらしい。でも、こんなにも若くてキレイな人だとは思っていなかった。急にはずかしくなり、ぼくはお父さんの背中にかくれた。

「おいこら、和寛」

お父さんはまゆを八の字に曲げ、困ったような表情でこちらを見ると、

「××××××××」

他人にはわかりづらいいつもの口ぐせをぼくに投げかけてきた。

案の定、家政婦さんには伝わらなかったようだ。彼女は首をひねって不思議そうな表情をうかべている。

「いやあ。こいつ、人見知りなんで、カツを入れてやったんですよ」

お父さんはぼくの背中をたたき、そう説明した。

「私、柊カエデと申します」

そういって、家政婦さんは深々と頭を下げた。